

アメリカにおける初期の盲ろう教育 —William Wade の盲ろう者リストからの検討—

中澤 幸子*

Sachiko NAKAZAWA

1. はじめに

盲ろうとは、視覚と聴覚に障害のある状態であり、視覚聴覚二重障害と表現されることもある。そして、これら2つの障害をあわせもつ者に対する教育を、盲ろう教育という。人間にとって視覚と聴覚は、認知発達や運動発達等において、また、周囲の把握や人とコミュニケーションを図るうえで、とても重要な感覚である。その2つの感覚器官に同時に障害があるという状況は、教育の困難性がきわめて高く、かつては教育を受ける機会はほとんどなかったのである。

最初に言葉を効果的に教えられた盲ろう者は、1789年パリで生まれ、幼い頃に聴力を失い、12歳の時に白内障となった、Victorine Morriseau だろうといわれている。彼女は、触るという、視覚障害者が読み書きを学ぶのと同じ方法を用いて教育された。そして、その内容は宗教の真理に関することに限定されていた。また、1795年にスコットランドで牧師の子どもとして生まれた James Mitchell も、先天性の白内障による視覚障害と難聴を抱えていた。そして、彼は妹の助けを借りながら手話でコミュニケーションをとることを学んだことが伝えられている (Burnet, 1835)。

日本における初めての盲ろう教育は、1949年、山梨県立盲学校に2名の盲ろう者の入学によって開始されることになった。しかし、それまでは盲ろう者への教育の蓄積はなく、国内において参考とすべき教育事例はなかった。そこで、参考としたのが、Laura Bridgman や Helen Keller が学んだ言語を模倣することによって獲得していく方法であった。しかし、この指導方法は対象の子どもたちには難しく、思うようには進まなかった。その後、1952年度から、梅津八三らの参加により、子どもの行動に応じた教育の実践が構築され、盲学校を中心として定着化が図られてきたのである (日本ライトハウス 21世紀研究会, 2002)。このように、Laura や Helen に対して実施された盲ろう者の教育方法をそのまま活かすことはできなかったが、日本の盲ろう教育の発展において、彼女らは欠かすことのできない存在である。

Laura や Helen が育まれたアメリカにおける盲ろう教育は、19世紀初頭、数名の盲ろう者たちへの教育の必要性が生まれたことによって始められた。そして、その後も複数の盲ろう者たちが教育施設に受け入れられ、教育が行われていた (Draper, 1904)。だが、このような教育実践があったことについて、これまで日本においてはほとんど報告されてきてはいない。

Helen やその他の盲ろう者たちと親しい友人であった William Wade は、1904年に「The Blind-Deaf」(以下、「著書」と表記)を出版した。この著書の中には、Wade (1900) が「A List of Deaf-Blind Persons in The United States and Canada」で報告した盲ろう者リストに、その後把握された盲ろう者に関する情報も加えられている。その他に、盲ろう者についての論文や報告書等も掲載されており、当時のアメリカの盲ろう教育の状況が把握できる資料であるといわれている (Waterhouse, 1977)。本稿では、Wade (1904)

* 名寄市立大学保健福祉学部

の著書にて報告された 1825 年から 1904 年までの盲ろう者リストとニューヨークろう学校で行われていた盲ろう教育の経過より、アメリカにおける初期の盲ろう教育を概観する。

II. 盲ろう者リストにて報告された盲ろう者たち

Wade (1904) は、盲ろう者となった時期や障害の程度によって、「Persons totally deaf and blind from an early age ; Class A」, 「Persons totally deaf and blind, who have lost one or both senses after maturity ; Class B」, 「Persons partially deaf and blind, the or with one sense entirely lost and the blind-deaf other very imperfect ; Class C」の 3 クラスに分けて報告している。

1. Persons totally deaf and blind from an early age; Class A

Class A で報告された盲ろう者の概要を翻訳後、要約したものが Table 1 である。このクラスには、幼少期から完全な盲ろう（以下「全盲ろう」と表記）であった者 53 名について記載されていた。

(1) 教育施設に入学した時期

盲ろう者として教育施設に入学した時期は、1820 年代 1 名、1830 年代 1 名、1840 年代 1 名、1870 年代 5 名、1880 年代 5 名、1890 年代 8 名、1900 年代 10 名、入学時期不明者は 22 名であった。

(2) 在籍した教育施設

53 名のうち 23 名が聴覚障害者を主たる対象とする教育施設（以下、「ろう学校」と表記）で、15 名が視覚障害者を主たる対象とする教育施設（以下、「盲学校」と表記）、盲学校からろう学校に学習の場を変えた者が 2 名、ろう学校から盲学校に学習の場を変えた者が 1 名、視覚障害者と聴覚障害者を受け入れている教育施設（以下、「盲ろう学校」と表記）が 2 名、盲ろう学校から盲学校に学習の場所を変えたのが 1 名、利用した教育施設が不明または教育を受けていない者が 9 名であった。

23 名の盲ろう者の教育を行ったろう学校は、ニューヨークろう学校 7 名、アメリカろう学校、オハイオろう学校、テキサスろう学校の 3 校に 2 名ずつの在籍が報告された。ケンタッキーろう学校、インディアナろう学校、ジャクソンろう学校、ジャクソンビルろう学校、ミシシッピろう学校、聖ジョセフろう学校、聖メアリーろう学校、バージニアろう学校、ルイジアナろう学校、ウィスコンシンろう学校、ワウソーろう学校には、それぞれ 1 名の生徒が学んでいた。

15 名の盲ろう者が在籍していた盲学校と在籍者数は、パーキンス盲学校 7 名、ペンシルバニア盲学校 3 名、イリノイ盲学校 2 名（そのうち、1 名は教育不適応により、自宅に戻された）、メリーランド盲学校 1 名、ニューヨーク盲学校 1 名（体調不良により退学した）、アイオワ盲学校、ヴィントン盲学校、サウスダコタ盲学校の複数の盲学校で学んだ者が 1 名であった。

ろう学校と盲学校の対象とする障害種が異なる 2 か所の教育施設で学んだ 3 名のうち、Martha Morehouse はニューヨークろう学校の後、フィラデルフィア盲学校へ移っていた。Maud Safford は、長い間在籍していたコロンバス盲学校では十分な指導を受けられず、オハイオろう学校へ転校した。8 歳で視覚障害となった Catherine Pederson は、始めはニューヨーク盲学校で学んでいたが、13 歳で盲ろう者となり、その後ニューヨークろう学校に転校した。盲ろう学校で学んだ 2 名はコロラド盲ろう学校であった。また、William Heulin は、ろう者の教育を主に行っていたハリファックス盲ろう学校からハリファックス盲学校に転校した。

そして、著書が出版された時にすでに亡くなっていたことが報告されていたのは、52 名中、9 名であった。

アメリカにおける初期の盲ろう教育

Table 1 Persons totally deaf and blind from an early age; Class A

名前	概要
Orris Benson	1882年生まれ。3歳で視力と聴力を失う。1889年にニューヨークろう学校に入学。1904年6月に卒業し、現在は自宅で療養中。生計を立てるために、木工職人として働いている。
Daisy Billings	1892年にケンタッキーろう学校に入学。がんのため退学し、最近亡くなった。
Julia Brace	1807年生まれ。1884年死去。自己流の自然な手話が唯一のコミュニケーション手段であった。1825年、アメリカろう学校に入学し、触手話を学んだ。ただ一人の視覚障害者であったが、学校の中で友人関係を築き、裁縫や編み物の技術も身につけた。嗅覚が非常に敏感であった。
Laura Bridgman	1829年12月21日。ハノーバー生まれ。1889年5月24日死去。1837年、パーキンス盲学校で教育を受ける。盲ろう者としては初めての教育を受けた。盲ろう者は教育を受けられないと結論づけた多くの著名人の意見に反して成功を取り、S・G・Howeの勇気と忍耐力、そして知的な技術は永遠の記念碑となった。嗅覚障害があった。
Oliver Caswell	1830年生まれ。1843年よりパーキンス盲学校で教育を受ける。1896年66歳で亡くなった。
James Caton	1877年にニューヨークろう学校に入学し、約2年後に視力を失う。嗅覚障害がある。
Richard Clinton	1877年、ニューヨークろう学校に入所。現在はギャロウデット・ホームにいる。
Eva Collins	9～10歳の間に盲ろう者となる。家族に頬に指で書くことでコミュニケーションをとるように指導した。
Terry C. Cox	1891年8月28日、バージニア州生まれ。1901年9月4日、バージニアろう学校に入学。11月末までに約75の単語を完全に習得していたが、体調不良を理由に学校を休学せざるを得ず、亡くなった。
Cora Crocker	1885年2月、マサチューセッツ州生まれ。8歳で視力を失い、聴覚は徐々に衰えていった。「はい」でうなずき、「いいえ」で頭を振り、「わかりません」で肩をすくめるなど、一般的な手話でコミュニケーションがとれていた。数年間ピッツフィールド貧困者施設にいたが、1901年にパーキンス盲学校に入所。急速に成長している。
Louis Daron	1878年生まれ[?] 1889年にルイジアナろう学校に入所して以来、そこにいる。9歳の時に失明したと考えられている。最初はTracy先生、次に耳の不自由なGoodwin先生で、手話によるコミュニケーションが指導された。他の人が自分の手を握ると理解し、手話をする。とても立派なミニチュア蒸気船を製作し、1840年のルイジアナ購入博覧会に展示された。勤勉で自立しており、自分のことについては常に情報を得たがる。
Edward K. Dietterich	フィラデルフィアのペンシルバニア盲学校に通い手のひらの字で指導を受ける。現在はフィラデルフィアの視覚障害者の施設に入所している。
Minnie Dunck	1887年2月1日、ウィスコンシン州ミルウォーキー生まれ。オランダ系の家系。両親はともに他界しており、兄と一緒に実家で暮らしている。
Henry Dunck	12歳の時に胸膜炎の発作で完全に耳が聞こえなくなり部分的に目が見えなくなった。病気になるまで市内の学校に通い、小学5年生に達していた。1904年9月、デラヴァンのウィスコンシンろう学校に入学したが、2週間後、学校医の命令で自宅に戻った。
Nathaniel C. Garton	1826年生まれ。ペンシルバニア盲学校で教育を受けた。死去したと思われる。
Linnie Haguewood	1879年アイオワ州生まれ。アイオワ盲学校、ヴィントン盲学校、サウスダコタ盲学校、シダーフォールズ州立師範学校でDonald先生に指導を受ける。Helen Keklerとほぼ同年で、同じ年で感覚を失った。彼女は非常に実用的で、生存している中で最も優れた少女の一人であり、とても優しい性格をしている。
Eva H. Wausau, Wis	1886年10月生まれ。5～6歳の時に聴覚を失い、言葉も失っている。視力はほぼ失われている。一時、ワウソーろう学校に在籍したが、1902年2月にデラヴァンろう学校に転校した。当時、デラヴァンのろう学校の普通生徒だったBoydが、一学期の半分の時間を面倒をみたところ、急速に成長した。その後も成長を続けています。
William H. Bay	セント・ジョルジュ州ニューファンド、1872年生まれ。ろう者のためのハリファックス盲ろう学校に1882年に入学し、1892年に去り、ハリファックス盲学校に入学した。そして、1892年に退学した。聴覚障害者の兄がいる。
Mazie Hinchcliffe	1880年生まれ、10歳で感覚を失う。両親はイギリスの労働者階級の立派な人だが、ほとんど教育を受けていない。ネグレクトされたケース。手話を教えようとする試みが行われたが、すべての試みに抵抗した。
Ella F. Hopkins	15歳。7歳の時、猩紅熱により盲ろう者となった。故郷のエディカ市の公立学校で教育を受け、4年間、ローマにあるニューヨーク中央ろう学校に通う。1903年9月にニューヨークろう学校に入り、順調に成長している。ニューヨークろう学校に転校した理由は、本や地図、盲人教育のための設備が整っているからである。
Sophia A. Hutson	ペンシルベニア州ウィルクスバール。盲ろう者である。Fischer夫人に師事。現在46歳。現在の病状は不明である。
David John	バージニア州スタントンの学校で学んでいたが死亡したとされている。
Helen Keller	1880年6月27日アラバマ州タスカンピア生まれ、18ヶ月で視力と聴力を失う。知的好奇心旺盛。1888年パーキンス盲学校に入学した。
King	キングという名の少女がラオスのビーコンから報告された。その郵便局長は、町にはそのような人はいないし、キングという名前の人もいないと言っている。
Edgar Korte	11歳。テキサスろう学校にて、Heflybower先生より学んでいる。1902年、Barrett先生は、彼の様子を次のように伝えている。盲ろう者ではあるが、明るい色を見分けることができる。教育を受けて間もないので、彼の精神状態は正確には把握されていないが、棚の上にある石鹸を見つけたことができたり、水が欲しいことを手をねじることによって表現したり、水の中で石鹸をかき混ぜて、(教師の手を使用し) シャボン玉を吹いた。
Emma Kubicek	イリノイ盲学校に1901年10月入所。1895年生まれ。3歳半の時に脊髄髄膜炎で視力と聴力を失う。非常に聡明できびきびとした性格である。
Minnie Kuhne	1865年生まれ。9歳で感覚を失い亡くなった。

Table 1 Persons totally deaf and blind from an early age; Class A (続き)

名前	概要
Jane McCormick	1866年8月、ニューアークに生まれる。1873年に感覚を失う。1875年にニューヨーク州の聖ジョセフろう学校に入所。入院時には微弱な聴力を持っていたが、喉の痛みで失われた。手話と指文字で指導を受け、急速に学習し、非常に美しい性格に成長した。1899年5月死去。
Katie M. McGirk	約24歳。1890年、10歳でニューヨークろう学校に入学し、継続して入所している。8歳で視力と聴力を失う。非常に聡明な少女で、新しい版画を簡単に覚えたことで知られている。
Martha Morehouse	1866年生まれ。1879年、ニューヨークろう学校に入学。ろう学校終了後、フィラデルフィア盲学校に入学。現在は、ジャージー市バヴォニア通りのカトリック盲人ホームに入所している。
Albert E. Nolen	マサチューセッツ州出身。1875年に耳が聞こえなくなり、5歳で失明。アメリカろう学校に通う。聡明な青年で、教育を受けている。ろう者の兄がいる。
Agnes O'Connor	ジャクソンビルのろう学校に在籍した。1872年生まれ。7歳から9歳の間に視力と聴力を失う。全ろう者。片目は全盲。もう片方の目の視力は回復している。
Leslie F. Oren	1893年10月6日、ネイビル生まれ。1898年9月、オハイオろう学校に入る。約600語の語彙を理解し、手書きのアルファベットで綴り、点字の読み書きができる。非常にまれに成長したケース。とても元気な人である。
Loca Pate	ミシシッピろう学校。1893年生まれ。幼少期から完全に耳が聞こえず、視力も十分ではない。1901年11月に入学し、Bodker先生のもとで学ぶ。
Hazel Porter	ペンシルバニア紙に載ったピッツバーグ貧困収容所にいる 聴覚障害者で、知的な遅れがある。
Catherine Pederson	8歳で視力を失い、ニューヨーク盲学校に入り、13歳で聴覚を失う。1891年にニューヨークろう学校に移る。
Ruby Rice	1887年10月テキサス州で生まれ、1891年秋にテキサスろう学校に入学した。2歳で盲ろう者となった。テキサスろう学校のWilliams先生が家に訪ねてきたとき、彼女の手をこすって手を洗いたいと伝えると、彼女はすぐに彼を洗面台に案内した。入学後はBarrett先生の下で学び、急速に上達した。今では多くの語彙を持ち、指文字で話し、点字も書くようになった。現在はHeflybower先生に指導をうける。
Elizabeth Robin	1884年7月テキサス生まれ。8ヶ月で視力と聴力を失う (Helen Keller と Linnie Haguewood が同じ感覚を失ったのと同じ年齢)。
Stanley Robinson	1865年10月、カナダ・オンタリオ州生まれ。感覚を失う前に読み書きなどを学んでいた。10歳で聴力を失い、徐々に視力は衰え、1893年に完全に失った。1877年9月、ニューヨークろう学校に入学。非常に優れた知的能力を持っており、新聞記事を書いたことがあり、文章も上手である。
Marian Rostron	マサチューセッツ州、1889年9月生まれ。7歳より視力と聴力が衰え始め、聴力は完全に失われ、視力が最も深刻な障害となるまで進化した。1901年9月、パーキンス盲学校に入学。ややゆっくりとした学びではあるが、十分に成長している。
Maud Safford	現在27歳程度。8歳の時に失明しコロンバス盲学校に通ったが、15年間何もしてもらわず、野生児だった。その後、オハイオろう学校に引き取られ、Buckles先生の指導を受けた。その後、順調に成長し、手書きのスペルと鉛文字でのスペルを理解している。現在はコロンバス近郊のオハイオ州の老人ホームにいる。
Clarence Selby	1873年イギリス生まれ。7歳で目が見えなくなり、8歳で耳が聞こえなくなる。バツファローの聖メアリーろう学校で教育を受ける。シカゴ在住。
Maud Scott	9歳。1901年、ジャクソンろう学校に入学し、Bodker先生の指導を受けている。入学当初は全くの無力だったが、徐々に回復している。
Carrie L. Self	オハイオ州 マウント・スターリング出身。1886年生まれ7歳の時より、急速に難聴が進行し、全ろう者となった。視力は着実に衰え、8歳の時には昼と夜の区別しかできなくなった。まだいくつかの言語を保持している。オハイオろう学校に入り、順調に成長している。
Francis L. Smith	2歳で視力と聴力を失う。メリーランド盲学校を卒業。杖作りなどで働き、自活して小遣いを貯めている。
Jessie Stewart	1891年6月。パリ生まれ。生後10ヶ月の時に脊髄髄膜炎で視力と聴力を失い、4歳まで回復しなかった。1900年9月、イリノイ盲学校に入所。教育不適応により自宅に戻された。
Thomas Stringer	1886年7月3日。ペンシルバニア州グリーン郡出身。1890年以前に視力と聴力を失い、1891年4月にパーキンス盲学校の施設の幼稚園に入る。Helen Kellerの献身的な努力によって最初の年の教育資金が調達されパーキンス盲学校に入ることができた。
Frederic Suhr	インディアナろう学校に数年いた。完全に耳が聞こえず、明るいものしか見えない。学校での勉強はほとんど上達しない。21歳。
Lottie Sullivan	15歳。コロラド州出身。コロラド盲ろう学校に7年間在籍している。最初は学習進度が遅かったが、最近急速に上達し、優れた英語を使い、タイプライターとミシンのエキスパートとなった。幸せな気質を持っている。
Beulah Templeton	1900年にはニューヨーク盲学校に在籍していたが、体調不良を理由に退学。1~2学期で戻ってきたが、体調不良を理由に再び退学となった。
Edith M. Thomas	マサチューセッツ州出身。1878年10月生まれ。4歳で視力を失い、6歳で完全な難聴になった。8歳でパーキンス幼稚園に入園し、12歳で盲ろう者施設に入所。現在 (1904年)、マサチューセッツ州モンソンのてんかん病院に入院中。詳細は不明である。
Ralph Woodin	11歳、コロラド州スプリングスのコロラド盲ろう学校に5期在籍している。聴力はかなりある。明るくて目が覚めやすい男の子である。
Rebecca Young	フィラデルフィアのペンシルバニア盲学校にいたが、後にホルチモアのメリーランド盲学校に移る。そこで彼女は、急速に衰退していたため、死んだと思われる。彼女の最後の情報は1901年である。

(Wade, W. (1904) より筆者作成)

また、著書発行時点で17名が教育施設に在籍し、学んでいた。その17名中、ろう学校在籍者は11名であり、在籍していた教育施設は、ニューヨークろう学校が3名、オハイオろう学校とテキサスろう学校が2名ずつ、ワウソーろう学校、ジャクソンろう学校、ミシシピろう学校、ルイジアナろう学校に1名ずつであった。また盲学校在籍者は4名であり、パーキンス盲学校が3名、イリノイ盲学校が1名であった。盲ろう学校在籍者は2名であり、2名ともコロラド盲ろう学校であった。

2. Persons totally deaf and blind, who have lost one or both senses after maturity; Class B

Class Bで報告された盲ろう者の概要を翻訳後、要約したものがTable 2である。このクラスは、学校教育終了後に1つか2つの感覚を失い全盲ろう者となった35名について記述されていた。

(1) 教育施設に入学した時期

盲ろう者となった以降に教育施設で学んだ者は5名であった。そのうちAnna Johnstonが1904年に Wisconsinろう学校に入学しており、その他4名の入学時期は未記載であった。30名は、教育施設で学んでいない、もしくは、就学中は盲ろう者ではなかった者であった。

(2) 在籍した教育施設

35名のうち17名がろう学校、盲学校が5名、ろう学校と盲学校の2つの教育施設で学んだ者が2名であり、11名は利用した教育施設が未記載、もしくは一度も在籍していない者であった。また、障害を抱えた順序は、まず聴覚障害者となり、後に視力を失った者が25名、先に視覚障害者となりその後聴力を失った者は2名、視力・聴力を同時に失った者は4名、時期が不明であった者は4名であった。さらに、著書が発行された時点において教育施設で学んでいた者は2名、休学中が1名、そして5名がすでに亡くなっていたことが示されていた。

ろう学校で学んだ18名が在籍した教育施設は、3名がニューヨークろう学校、オハイオろう学校と Wisconsinろう学校には2名ずつが学んでいた。そして、アイオワろう学校、アメリカろう学校、コロラドろう学校、フィラデルフィアろう学校、イリノイろう学校、国立ろう学校、ミネソタろう学校には、それぞれ1名ずつが在籍していたことが報告された。また、テキサスろう学校とアーカンソーろう学校の2カ所の聴覚障害者を専門とする教育施設で学んだ者も1名いた。3名については、在籍していた教育施設は未記載であった。

盲学校で学んだ4名は、ニューヨーク盲学校、ジェーンビル盲学校、ジョージア盲学校、西ペンシルバニア盲学校の4校で1名ずつが学んでいた。

ろう学校と盲学校の2つの教育施設で学んだ2名のうち、James Nealは18歳で視力と聴力を同時に失ったため、テネシーろう学校で指文字を学んだ後に、ケイン・シートづくりを学ぶためにテネシー盲学校に入った。もう1名のSusan Harringtonは、パーキンス盲学校に入学後、アメリカろう学校に転校した。

3. Persons partially deaf and blind, the or with one sense entirely lost and the blind-deaf other very imperfect; Class C

Class Cに報告された盲ろう者の概要を翻訳後、要約したものがTable 3である。このクラスには、全盲ろう者ではないが、聴覚・視覚のいずれか一方の感覚が完全に失われており、もう一方の失われていない感覚も完全には機能してはいない22名について、説明されていた。

22名が在籍した教育施設は、ろう学校、盲学校、それぞれ6名であり、盲学校とろう学校の主たる障害が異なる2つの教育施設で学んだ者は1名、盲ろう学校が2名であった。残りの9名は、教育に関する内容に

Table 2 Persons totally deaf and blind, who have lost one or both senses after maturity; Class B

名前	概要
Minonia Abbott	コロラド・スプリングスのコロラドろう学校の元生徒で、卒業後に失明した。詳細は不明。
August Boehne	インディアナ州出身。斧が頭に落ちてきて日射病になり視力と聴力を失った。手のひらに書くことを学んだ。死去。
Miss Bond	バージニア州オグデン出身。耳が聞こえないだけだったので、聴覚障害者の教育を受けた。後に失明。1884年にmoonが読めるようになった。死去。
Maggie Castor	ピッツバーグの西ペンシルバニア盲学校にいる。17歳。外見は明るく、コミュニケーション方法を少し学んだ。今年は学校には登校していない。
Frederick E. Coke	ペンシルベニア州出身。1860年9月生まれ。ウィスコンシンろう学校で教育を受ける。ろう者の Mary Jane Hackett と結婚し、男の子と女の子の2人の子供がいる。破片が飛び込んできて片目の視力を失った。わずかに農作業に従事している。William Edger の息子コークと Ella Coke の弟。1人の聴力のある兄と目の見える兄がいる。
Emeline Comp	1870年にイリノイろう学校を卒業。1900年に失明。点字と点字を学ぼうとしたが失敗し、10日でmoonを学んだ。
Joseph Copper	1852年生まれ。1898年より精神障害者。ハンコック郡(インディアナ州)の農場にいたが、1900年にインディアナポリスの中央病院に入院。親族は不明。病院の記録では、慢性的な躁病があり、銃による自殺未遂で目が見えなくなったと言われている。聴覚障害があり、学校では制御不能で危険であり、能力不足を理由に退学となった。
Walter A. Garrett	1871年1月、ジョージア州ウォーカー郡生まれ。視力は9歳から衰え始め、強い光だけを意識する。ラッパ型補聴器でわずかに聴こえる程度である。「教育を受けていない」と言うが、大多数の盲ろう者よりも教養があるので、「学校で教育を受けていない」という意味ではないだろう。
Susan Harrington	1835年 マサチューセッツ州生まれ。双子の兄がいる。二人とも耳が聞こえず、視力に障害があったが見えてはいた。パーキンス盲学校に1年間在籍後、1845年から1852年までハートフォードのアメリカろう学校に通っていた。1869年、ファンウッドろう学校の卒業生 Harrington と結婚し、娘1人をもうけた。1896年に失明し、マサチューセッツ州の Hayes 先生に活字の読み方を教わった。数年前に兄が亡くなり、本人も1年ほど前に亡くなっている。
Mary Hug	ペンシルベニア州フィラデルフィア出身。ろう者として教育を受けたのちに、盲ろう者となる。
Anna Johnston	1887年3月、ウィスコンシン州オークレア生まれ。15歳で視力と聴力を失う。1904年1月、デラヴァンのウィスコンシンろう学校に入学。語彙力と発話力があり、豊富な知識を持っている。とてもやさしく、明るく、利己的で、思いやりがあり、礼儀作正しい。
George Jones	ジョージア盲学校で盲人として教育を受ける。非常に正確なタッチと素早さで、新しく印刷された物を覚える。ジョージア州オーガスタの施設にいる。
Lucretia B. Kent	ニューハンプシャー州アマースト出身。
Lucretia B. Kent	聴覚障害者として生まれ、アメリカろう学校で教育を受け、同校を二等席で卒業。86歳の時、ほとんど視力を失っていたが、盲ろう者の Lydia Hayes から数週間、moon を学び、その後、moon の本を楽に楽しむことができるようになった。1902年2月に死亡。
John L. Latjbay	ミネソタ州ダルーズ出身。ミネソタろう学校に数年通う。卒業後、火薬の爆発で失明。
Eliza Levy	ニューヨークろう学校を卒業した時は、視力があった。その後、ギャロデットホームに入所していたが、精神的に不安定となっていたため、ニューヨーク市の精神病院に移された。
Fannie Molson	1863年、ニューヨーク州に生まれる。18歳で聴力を失い、同時期に視力もさがりはじめ、35歳で全盲になった。耳元で非常に鋭い音を聞くことができるが、何の音かは認識できない。とても明瞭な発話を保持している。Austin 先生に手で読む方法学んだ。
Lucy Moon	カンザス州出身。2歳の時に事故で片目を失明。1856年にアイオワろう学校に入学、1864年に退学。1868年、Robert(ろう者)と結婚。1876年、残りの目を失明。視覚障害者のための読み物の学習に失敗したが、1902年2月、盲ろう者のための2週間の授業で、苦労してmoonの読み方を学んだ。
Samuel Moses	ワシントンハイツのニューヨークろう学校で教育を受ける。卒業後、失明。以前はギャロデット・ホームにいたが、現在はブラックウェルズ・アイランド・アルムハウスの盲人病棟にいる。
James Neal	テネシー州出身。18歳で視力と聴力を失う。テネシーろう学校で指文字を教わり、テネシー盲学校でケイン・シートづくりなどを学んだ。彼と母親は2年前にノックスビルを出ており、行方は不明。
Joseph F. Ralston	インディアナ州出身。63歳。60歳で視力を失い、15年前から徐々に聴力を失い、わずかに聞こえる程度である。1年以内にmoonが読めるようになり、暗い時間の倦怠感が大幅に軽減された。
Anna Reinhardt	ろう者として教育を受けたが、後に失明。1898年フィラデルフィアで死去。
Adam Rickart	ウィスコンシン州在住。おそらく33歳程度。最初は聴力が落ち始めたが、完全に失われる前に失明した。ジェーンズビル盲学校で数年間過ごした。指文字を知っているが、alphabet glove を使っている

アメリカにおける初期の盲ろう教育

Table 2 Persons totally deaf and blind, who have lost one or both senses after maturity; Class B (続き)

名前	概要
John W. Porter Riley	オハイオ州アクロン出身。1888年生まれ、8歳の時に両感覚を失う。オハイオろう学校に入り、Hedden先生より学んでいる。順調に成長している。
Anita Silva	ニュージャージー州出身。1861年生まれ。聴力・視力共に20歳から衰え始め、30歳で完全に耳が聞こえなくなり、35歳で全盲となった。聴覚障害者や視覚障害者の学校に行ったことはない。自己流の指文字を学んでいたが、フィラデルフィアのムーンブックソサエティの客員教師の一人であるMoore氏の3回のレッスンでmoonを習得した。現在、ペンシルバニア州の老人ホームにいる。
Nellie C. Small	ニューハンプシャー州ファーマントン出身。40歳。22歳で聴覚を失い、33歳で視力を失い、片目は10分の1、もう片目は14分の1しか見えない。指文字とアメリカ点字を学ぶ。
William Sprague	ニューヨーク州ワッパーズ・フォールズのギャロデット・ホームにいる。ワシントンハイツのニューヨークろう学校で教育を受ける。卒業後、失明。
Henry G. Stephens	コネチカット州出身。1837年2月ニューヨーク生まれ。27歳で聴覚を、49歳で視力を失う。聴覚を失った後、コミュニケーションには指文字を使い、視力を失ってからはalphabet gloveを使うようになった。Line letterを読む。
Mary E. Stetler	ペンシルバニア州出身。1852年生まれ。1863年フィラデルフィアろう学校に入学。1869年に卒業。1880年に失明。兄1人、妹の一人が盲ろう者。一人の妹がろう者。両親は晴眼者。点字とmoonを読むことを学ぶ。現在、ペンシルバニア州ドイルスタウンの聴覚障害者の老人ホームに入所。
William Terry	コネチカット州アンソニア出身。現在78歳。聴覚は、70歳になるまでゆっくりと衰えていった。この8年で視力も聴力もさらに衰えた。会話はalphabet gloveを使用し、moon、New York Point、アメリカ点字が読める。とても知的で教養のある紳士。
Sallie Thornton	1868年生まれ。中学時代に視力と聴力を失う。テキサスとアーカンソーのろう学校で学ぶ。現在はテキサス州ハンターに在住。活字の本を読むのが得意になり、明るく幸せそうにしている。
Nancy Townsend	1831年9月、オハイオ州で聴覚障害者として生まれる。オハイオろう学校に4年間在籍する。常に視力は弱く、63歳で全盲になった。15年間服飾業で働き、現在は自分で作っている。現在はオハイオ州のコロンバス養護老人ホームに入所している。
Madeline G. Wallace	25歳。8歳で見えなくなり、いったん回復したが、11歳で完全に失明し、1年後には聴力も失った。家族から alphabet gloveを教わり、ニューヨーク盲学校でニューヨークポイントを読んでいた。最近是指文字と点字も学んだ。現在はニューヨークの聖ドミニク修道院で姉妹で働いている。とても愛らしい人物。
John P. Walsh	インディアナ州出身。1873年9月2日生まれ。7歳で全盲となり、3年後に視力を回復する。1886年に聴覚を失うが病気が明確な原因は不明。1886年にエバンスビルろう学校、1889年9月に国立ろう学校（現ギャロデット・カレッジ）に入学。左目を再び失明し、1892年6月に大学を退学後、全盲となった。英語とドイツ語を話し、手話と指文字を使うが活字は読めない。高い教育を受けており知識も豊富。
Lucy A. Whitlock	コネチカット州出身。約80歳。10年前から耳が聞こえなくなり、その後、目が見えなくなった。alphabet gloveで会話をする。視覚障害者のための文字は習っていない。

(Wade, W. (1904) より筆者作成)

ついて記載のなかった者、もしくは教育施設で教育を受けていない者であった。感覚器官に障害を抱えた順序としては、聴覚障害者となった後に視覚にも障害を抱えた者、反対に視覚障害者となった後に聴覚に障害を抱えた者、いずれも6名であった。また、聴覚と視覚に同時に障害を抱えた者が1名、残りの9名については、その情報については明記されていなかった。さらに、著書発刊当時、ろう学校と盲学校に2名ずつの生徒が在籍しており、1名の者がすでに亡くなっていた。

ろう学校で学んだ6名が在籍していた教育施設は、ウィスコンシンろう学校が2名、フィラデルフィアろう学校、フロリダろう学校、メリーランドろう学校、セントルイスろう学校の4校に1人ずつであった。盲学校で学んだ6名については、ブラントフォード盲学校、グレース・コーブランド盲学校、フィラデルフィア盲学校、ジャクソンビル盲学校、ミネソタ盲学校であり、各学校に1名の在籍が確認された。また、イリノイ盲学校とウィスコンシン盲学校の2カ所の視覚障害者を専門とする教育施設で学んだ者も1名もいた。さらに、Eleanor Kelley は、聖ジョセフろう学校とニューヨーク盲学校という、対象とする障害が異なる2カ所の学校で学んだが、いずれも短い在籍年数であった。

Table 3 Persons partially deaf and blind, the or with one sense entirely lost and the blind-deaf other very imperfect; Class C

名前	概要
Charles Brown	フィラデルフィアろう学校。1847年7月生まれ、完全に耳が聞こえず、ほとんど目が見えず、強力なメガネを使わないと見ることができなかった。一人で公の場に出かけた。非常に活発であり、読書家であり、素晴らしい記憶力を持っていた。1883年に死亡。
C. M. Christiaanse	1867年にオランダで生まれ、1879年にアメリカに移住。生まれつき目が見えず、白内障のためのカウチングで視力を得たが、2年後に再度失明した。聴覚は6歳頃から衰え始め、今ではほとんど聞こえていない。半口蓋があるため、常に発声に問題があった。オランダでよい指導をうけており、プリントを自由に近づけて読んでいた。
Ella Coke	1859年生まれ、耳が聞こえないが視力はある。強い光の中では、片目では非常にはっきりとした文字を読むことができる。 Wisconsin ろう学校で教育を受ける。
William E. Coke	1867年8月生まれ。視力はわずかに残っているだけで、実用には十分ではない。 Wisconsin ろう学校で教育を受けた。
Grace M. Copeland	コネチカット州のグレース・コーブランド 盲学校に在籍。聴覚障害者で、ほぼ全盲であった。
John H. Cummings	1849年イリノイ州生まれ。6歳の時に事故で失明。イリノイ州と Wisconsin 州の盲学校に5年間通う。24歳の時に聴力が著しく低下した。会話には alphabet glove を使う。絨毯を織る仕事と技術によって、彼は十分な収入を得た。 Wisconsin 州フォート・アトキンソン在住。
William Dunham	フロリダろう学校。耳が聞こえないし、視力も十分ではない。
Morrison Heady	4歳の時に事故で片目を失い、16歳の時に別の事故（いずれも軽度）で残りの目を失明。この2つの事故の間に、さらに深刻な事故があり、難聴の原因となった。40歳で完全に耳が聞こえなくなったが、50歳で片目の視力が部分的に回復した。コミュニケーションのために alphabet glove を考案、活用し、Laura Bridgman から指文字を学んだ。短期間の教育しか受けていないが、教育を受けた立派な紳士であり、数冊の本を書いている。
Hoggsett	J. V. Hoggsett の息子。聴覚障害者であり、視覚障害者である。教育を受けていない。
Eleanor Kelley	盲ろう者として『ニューヨーク・ジャーナル』で初めて報告されたことが、Deaf-Mutes 1 と Volta Bureau の記録に残されている。聖ジョセフロう学校に2年間在籍した後、自宅に戻る。その後、ニューヨーク盲学校に入学し、1年間在籍したが、再び自宅に戻った。視覚障害で言葉は話さないが、よく周囲の話には耳を傾ける。
Adam Long	ペンシルバニア州ピッツバーグの新聞で、耳が聞こえない、目が見えないと報道され、ボルタ局にも記録されている。近視で難聴であるが、一人で街を歩き回っている。
Albert Jobus	メリーランドろう学校。完全に聴力は無いが、勉強するには十分な視力がある。
John Lehman	セントルイスろう学校。18歳くらいで、ほとんど視力がない
William A. Miller	カリフォルニア州出身。1871年イギリス生まれ。11歳で失明。フィラデルフィア盲学校で教育を受ける。通常は非常に耳が遠いが、その時々によって異なる。作家。「エデンの物語」という興味深い本を書いている。商売上手で、自立し、お金を貯めている。
Nora Neiderhouse	インディアナ州出身。最初に視力を失い、その後回復したが、すぐに聴力を失う。現在も視力は非常に低下しており、目の上半分しか見えない。他の場所では指摘されている August Boehne の姪である。おそらく体質的素因がある
Alvilde M. Oxeson	ミネソタ盲学校。ラップ補聴器の助けを借りて、聞くことができ、使える程度の視力を持っている。
Peyton Parramore	ジョージア州出身。約40歳。農場でかなりの仕事をこなしている。教育を受けていない。
Grace Sperow	カリフォルニア州出身。17歳で全盲。聴覚はほとんどない。カリフォルニアろう学校にいた。
Joseph Sinkinson	聴力、視力、共にほとんどないと言われている。
Ada M. Youmans	完全な聴覚障害者でも全盲でもない。実用的には十分にそれぞれの感覚を持っている。
Made Woodbury	1862年ダンビルに生まれ、4歳で失明。16歳まで家庭で教えを受け、ジャクソンビル盲学校に入学。23歳の時に聴力を失い始め、27歳の時には耳が聞こえなくなっていた。発話を保持している。

(Wade, W. (1904) より筆者作成)

III. ニューヨークろう学校における盲ろう教育

Wade (1904) は、著書の中の「The Education of Blind-Deaf Children in the New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb」にて、ニュー YORK ろう学校における盲ろう教育の経過を、Class A のリストに表記された 8 名の生徒の姿を通して報告している。その原文を日本語に訳した内容の一部を Table 4 に示す。

Table 4 ニューヨークろう学校にて盲ろう教育を受けた8名の概要

James H. Caton (Wade, W. [1904] 51-53)

1871年2月6日、Catonという先天性のろう哑児が入学した。当時10歳だった。1874年秋、3年近く学校に通っていた彼は、不幸にも重い病気にかかり、その結果、全盲になってしまった。1年近くの休学後、通常のクラスで教育を続けることを希望したため、担任は特別な配慮をしながら、彼の学習を補った。しかし、この方法は同級生にとっては不利益であり、Catonにとっても十分に満足するものではなかった。

教師の一人であったFitzHugh先生が彼に深い関心を持ち、指導を引き受けることを願い出た。そして、1876年12月27日にそれが認められた。彼女はニューヨーク盲学校を頻りに訪問し、Waitや彼の助手たちから特別な指導と援助を受けたのである。

Catonは、英語の理解力と使い方、算数、アメリカ合衆国の歴史の知識の学習において大きな進歩を遂げた。金属製のまっすぐな枠と活字の数字を使って、算術の例を示した。盛り上がった文字で印刷された本やニューヨーク式点字で作られた通信を読み、溝付きの筆記板で紙に書いた。地理学では、海や大陸の相対的な位置や範囲、国の構成、山の位置、川の流れ等が、彼の頭の中にはっきりと描けないという大きな困難に遭遇した。しかし、立面図や分解可能な地図を使用し、この困難は克服された。

また、Catonの指導に使われた主要な道具は指文字であり、質問や文章は教師の手によって彼の手に綴られた。彼は指文字を使って返事をした。……(後略)。

Stanley Robinson (Wade, W. [1904] 53-54)

ニュージャージー州出身の12歳のRobinsonは、7歳の時に聴覚を失った。同時に視力も非常に低下し、次第に全盲となった。Robinsonは、聴力を失う前に算術的な本の読み方を学んでいたため、言語能力は保持されていた。しかし、文字の読み書きは難しかった。だが、一年もしないうちに、それまで読んでいた本よりも高いレベルの本を声に出して読めるようになり、歴史や地理の簡単な内容も暗唱することができるようになった。また、文字を書くことも教えられ、簡単な文章も作れるようになった。そして、彼の発音はより明確で正確なものとなり、大幅に改善された。

Richard S. Clinton (Wade, W. [1904] 54-55)

もう一人は聴力も視力もなく、言語の知識もなく、周囲の物の見方もわからないClintonという12歳の少年であった。CatonやRobinsonと異なり、視力を失くす前に概念や言語という知識の学習がされていたという有利な経験はなかった。そのため、Clintonの知的な発達を促すことはより難しく、教師の創意工夫が必要であった。アルファベットのすべての文字を含む12個の物体の名前が、教師が手を握った状態で、手話によって説明された。その後、それらの物体を触らせ、それぞれの名前を指文字のアルファベットで綴った。……(中略)……次に、球状の頭のついた鋸を木のブロックに打ち込んで作成した、アルファベットの拡大文字を使い、触って物の名前を読むことを教えられた。そして、これらの文字を組み合わせて、言葉の一つを作り、文字と指文字の対応関係を教えられた。その後、黒板に文字を書く訓練が行われたが、これは比較的簡単な作業であった。

Martha E. Morehouse (Wade, W. [1904] 55)

1879年9月に入学したMorehouseは8歳まで聴力があり、話し方もはっきりとしていた。しかし、彼女は読むことも書くこともできなかったもので、すぐに読むことも書くことについての指導をすることとなった。しばらくすると、彼女は手のひらに綴られた手書きの文字を読みとれるようになり、その文字で伝えられた言葉に従って行動できるようになった。また、鉛筆を使って書くことも習得し、簡単な手話も使えるようになった。

Katie McGirk (Wade, W. [1904] 56)

1890年の秋、12歳で入学した。1888年に吹雪で視力を失い、耳も聞こえなくなっていた。しかし、Meigs先生が教えるクラスに配属された時には、将来に大きな期待が持てるような、素早い洞察力と知識の習得への興味を示していた。彼女が最初に学んだのは、視覚障害者のための手書き文字とmoon1)のアルファベットであった。

Orris Benson (Wade, W. [1904] 56-57)

3歳の時に脳脊髄膜炎により視力と聴力を失った。1889年に8歳で入学し、それまでは何も教育を受けていなかった。そのため、Tassell先生の下で年少クラスに配属された。その指導方法は、Clintonに行ったのと同様の方法や内容であった。上のクラスに移るのに適した年齢と体力になってからは、Montgomery先生の下で、国語、算数、アメリカ合衆国の歴史、地理、マナーとモラルの指導を受けた。半日をこれらの指導に充て、残りの時間は、Nixon先生から話し方の指導を受けた。

Catharine Pederson (Wade, W. [1904] 57)

15歳の時、ニューヨーク盲学校からこの学校にきた。8歳で失明した彼女は、13歳の時に聴力を失い、盲学校に長く通うには適さない判断され、自宅に戻された。その後、3年の時を経て、1900年10月にニューヨークろう学校に入学した彼女は、今では立派に成長し、頭脳明晰で、クラスのリーダーの一人となっている。

Ella Hopkins (Wade, W. [1904] 57)

7歳の時に猩紅熱により耳が聞こえなくなったのと同様に、ほぼ全盲となった。故郷のユティカ市の公立学校で教育を受けた後、ローマにあるニューヨーク中央ろう学校に4年間通った。1903年9月に転入し、順調に成長している。

Wade, W. (1904) より筆者作成。

「The Education of Blind-Deaf Children in the New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb」より一部抜粋した。

先天性の聴覚障害者であった Caton は、1871 年、10 歳の時にニューヨークろう学校に入学した後、在籍中に盲ろう者となった。約 1 年間の休学を経て通常のクラスで授業を開始したが、その後、FitzHugh 先生を担任としたクラスにて学ぶこととなった。Caton の担任となることが決まった FitzHugh 先生は、ニューヨーク盲学校を訪れ、指導の仕方について援助を受けていた。Caton の指導には、主に指文字が使われ、特に算数、英語、アメリカ合衆国の歴史の学習において成果が見られた。このような Caton への教育が成功したことがニューヨークろう学校の理事会にも認められ、教育を必要とする盲ろう者にも施設を開放することとなった。そして、1878 年に Stanley Robinson と Richard. S. Clinton がニューヨークろう学校に入学した。2 名とも 12 歳であり、すでに盲ろう者となっていた者であった。

入学当初、Robinson にとって文字の読み書きは困難であった。しかし、失聴前に本の読み方を学び言語能力は保持されていたことから、盲ろうクラスでの教育によって高いレベルの本も読めるようになり、発音も大幅に改善された。一方、Clinton には、Robinson のように視力や聴力を失う前に概念や言語といった知識の学習はなされていなかった。そのため、指文字や文字の習得には教師の創意工夫が必要とされた。

1879 年に入学してきた Martha E. Morehouse は、8 歳まで聴力があり、話し方も明瞭であったが、読み書きが習得できていなかった。読み書きの指導後には、掌への手書き文字の読み取りや理解や、鉛筆で書くことが可能となった。また、簡単な手話も使えるようになり、読み書き以外のコミュニケーションに必要な技術も獲得していった。

そして、翌年の 2 月には、Caton, Robinson, Clinton, Morehouse を指導してきた FitzHugh 先生が退職となり、一時的に 2 名の男性教師が指導を行った。また、1883 年には、盲ろう者クラスの生徒数は 6 人に増えた。

著書の発行当時にニューヨークろう学校に在籍していたのは、Katie McGirk, Orris Benson, Catharine Pederson, Ella Hopkin の 4 名であった。1888 年に視力と聴力を失った McGirk は、1890 年の秋に 12 歳で入学した。彼女が最初に学んだのは、視覚障害者のための手書き文字と moon¹⁾ のアルファベットであり、知識を習得することに興味を示していた。Benson は、3 歳の時に脳脊髄膜炎により視力と聴力を失い、1889 年に 8 歳で入学した。入学前までは、何も教育を受けていなかったため、Clinton と同様の方法や内容で学んでいた。Pederson は 8 歳で失明し、13 歳の時に聴力を失った。ニューヨーク盲学校に在籍していたが、15 歳の時にニューヨークろう学校に入学した。頭脳明晰であり、クラスのリーダーとなった。盲ろうクラスの中で最年少であった Hopkins は、猩紅熱により 7 歳で全盲ろうとなった。故郷の公立学校で教育を受けた後、4 年間ニューヨーク中央ろう学校に在籍し、1903 年 9 月にニューヨークろう学校に転入した。McGirk, Benson, Pederson, Hopkins の 4 名は全員が盲ろうクラスで学んでいたが、授業以外の時間には、ろう学校内の通常のクラスにいる聴覚障害の生徒たちと指文字や手話を通して自由に交流し、学校生活を楽しんでいった。

このように、ニューヨークろう学校における盲ろう教育は、聴覚障害者として学んでいた Caton が、在学中に盲ろう者となったことによって開始された。そして、それ以降も継続して盲ろう者を受け入れ、盲ろう教育の場を提供していたのである。

IV. 考察

Wade (1904) の「The Blind-Deaf」によって報告された盲ろう者たちの姿より、以下のようなアメリカにおける初期の盲ろう教育の状況が考察できる。

1. 盲ろう教育の始まり

盲ろう者として教育施設で最初に学んだのは、1825年にアメリカろう学校に入学した Julia Brace であった。彼女はそこで触手話を学び、他のろう者との友人関係を築いていたことが報告されていた。その後、Nathaniel C. Garton が1826年に生を受けたことが記載されていたが、詳細は明記されていないため、いつ、どこで教育を受けたのかは不明である。Julia に続いて、1837年に Laura, 1843年に Oliver Caswell がパーキンス盲学校に入学した。また、著書には記載されていなかったが、パーキンス盲学校では、1940年代に、Lucy Reed, Almira E. Alden の2名の盲ろう者への指導も行われていた (Nordstrom, 1986)。このように、20世紀前半、パーキンス盲学校では4名の盲ろう者を受け入れ、教育に取り組んでいた。しかし、パーキンス盲学校にて4名の盲ろう者が教育されて以降の約30年間、Wade (1904) で報告された盲ろう者のリストからは、盲ろう者への教育が行われていたという事実は確認できない。このことから、この時期、盲学校やろう学校等の教育施設で盲ろう者を積極的に受け入れてはいなかったことが想像できる。アメリカにおいて、ろう学校の開校は1820年代、盲学校の開校は1830年代であり、その後、徐々に設立され、拡大されていった (Nordstrom, 1986)。しかし、この時期のろう学校や盲学校の在籍者の年齢にはばらつきがあり、指導者も経験不足で、財政的にも乏しかった (山崎, 2011)。このような、ろう学校や盲学校が発展途上にあったのと同時期に盲ろう者への教育も始められたものの、実験的なレベルにとどまり、継続した取り組みには至らなかったと思われる。

2. 1870年以降の教育

1870年代に入ると、教育を受けていた盲ろう者の情報が、再び散見され始める。その中で、最初に盲ろう者への教育の実施が確認されたのが、ニューヨークろう学校である。ニューヨークろう学校では、在籍中に視覚障害も加わり全盲ろう者となった Caton に対して行われた指導の成功によって、盲ろう者の積極的な受け入れが始められた。その後、盲ろう者のクラスを設置したり、複数の教育者で教育内容を構成して指導したりというように、盲ろう教育への組織的な取り組みが行われるようになったのである。ニューヨークろう学校がCaton への指導を始めた数年後より、パーキンス盲学校を始めとして、その他多くの教育施設においても、盲ろう者を受け入れていたことが確認されるようになる。その中の一人に、Helen の名前もあげられていた。彼女が教育を受け始めた時期には、すでに複数の盲ろう者の教育の実践が行われていたのである。また、Helen を指導した Anne Sullivan は、パーキンス盲学校において、Laura を通して盲ろう者との意思疎通の仕方や指導方法を学んでいた (山崎, 2011)。このように、Helen が盲ろう教育の成功者となった要因の一つとして、いくつかの参考となる指導事例や成果があったことが推測できる。

3. 盲ろう者となった時期及び感覚を失くした順序

盲ろう者リストによると、幼少期からの全盲ろう者53名のうち、生まれながらにして聴覚と視覚に障害があったことが記載されていたのは、Loca Pate 一人だけであった。ほとんどが、何らかの病気や事故により盲ろう者となった者であった。また、学校教育終了後に片方もしくは両方の感覚を失い全盲ろうとなった者の多くは、初めに聴覚に障害を抱えていた。このように、報告された盲ろう者リストの中には、先天的に全盲ろうであった者の姿はほとんど見当たらなかった。そして、盲ろう者になった時期や原因、障害の程度は、それぞれ異なる様子が報告されていた。そのため、例えば、Caton, Robinson, Clinton たちは、同じニューヨークろう学校で学んでいた。しかしながら、盲ろう者になる前にどのような能力を獲得していたかによって、教育の方法や内容は異なっていた。このことから、画一的な教育ではなく、一人ひとりの実態に応じた

指導計画が立てられ、学習が進められていたことが推察できる。また、教育施設に入学したが、適応できず
にその場所から離れた者も散見されたことから、一定の学習能力や適応能力を持っていない者は、盲ろう教
育の対象から外されていたことが理解できる。

4. 学びの内容

教育施設において、盲ろう者たちがどのようなことを学び、身につけていたかを調べると、物を正確に理
解するための触り方、文字・点字・moon 等による読み書きの方法、手話・指文字・掌への文字の綴り・
alphabet grove²⁾ 等による会話の方法等が散見された。これらの共通点として、手を使う、ということがあ
げられる。Miles (1997) も「盲ろう者の手には、通常の道具としての手の役割に加え、聴力や視力の感覚器
官として、人や物、言語へのアクセスを可能にすることである」と述べている。このように、盲ろう者にと
って、聴覚や視覚の補助手段としての手の役割や大切さは、当時の盲ろう教育者にも十分に理解され、教育
の中で取り組まれていたのである。盲ろう者にとって聴覚や視覚を補う役割を持つ手の重要性は、いつの時
代であっても変わらないことが再確認できる。

5. 盲ろう者が学ぶ教育施設

パーキンス盲学校は、Laura と Helen を育てたこと、20 世紀以降の盲ろう者への教育の取り組み等から、
盲ろう教育の先駆的な教育施設として広く知られている。そして、盲ろう者として初めて教育施設で学んだ
Julia もまた、アメリカろう学校卒業後にパーキンス盲学校に入学し、Laura と同じ教育が試行されていた
(指田, 2012)。さらに、アメリカ盲人指導者協会 (現在の、アメリカ視覚障害者教育者協会) は、1891 年
に盲ろう者の生徒は盲学校で教育を受けるべきであると勧告したのである (Waterhouse, 1977)。これらの
ことから、盲ろう者への教育を実施する教育施設は盲学校というイメージがある。

しかし、実際には多くの盲ろう者がろう学校に在籍し、学んでいたことが明らかとなった。その理由は明
確ではないが、多くの盲ろう者がコミュニケーションの手段として手話や指文字という聴覚障害者が使用す
る言語を学び、使用していたことも要因の一つとして考えられる。Helen もまた、14 歳の時にライトヒュー
マンろう学校に入学し、発声の勉強に励んでいた (山崎, 2011)。そして、Wade (1904) は、盲ろう者に必
要なのはコミュニケーション力であり、それを教える技術は、ろう学校の教師の方が準備はできている、と
いう意見を述べている。

このように、当時、盲ろう者が学ぶ場所が定まっていな中で、盲ろう者への教育に取り組む教育施設は
徐々に増えていった。とはいえ、その実例はまだ少なく、どのような教育を行ったらよいか、盲ろう教育者
たちは試行錯誤していたであろう。そして、ニューヨークろう学校の FitzHugh が、Caton を指導する際に
盲学校を訪問して指導や援助を受けたように、時には盲ろう教育者がお互いに情報を提供しあっていたこと
が想像される。さらに、複数の盲ろう者たちが、盲学校、ろう学校という障害種の異なる 2 カ所の教育施設
で学んでいたことから、盲ろう者たちもまた、自分に必要な教育が受けられる場所を探し求めていることが
推測できるのである。

V. まとめ

本稿では、Wade (1904) の「The Blind-Deaf」で報告された盲ろう者リストとニューヨークろう学校で実
施されていた盲ろう教育を通して、アメリカの初期の盲ろう教育を概観した。

1925年にJuliaが初めてろう学校で教育を受けて以降、複数の盲ろう者たちが教育施設で学ぶ機会を得ていたことが確認できた。また、ほとんどの盲ろう者が先天的ではなく、何らかの病気や事故等によって盲ろうとなっていた。そのため、盲ろう者となる前にどのような能力を身につけていたかによって、その後の指導方法や内容が異なっていた。つまり、一様の教育には縛られず、その指導の場、内容、方法等は、それぞれの盲ろう者の実態に合わせて取り組まれていた。そして、手探りではあるが、盲ろう者一人ひとりの可能性を大切に育てる教育が行われていたといえよう。

註記

- 1) 19世紀にイギリスのWilliam Moonによって発明された視覚障害者用文字の一種である。主に英語圏で使用される。点字と同様に凹凸で表現するが、点字とは異なり、直線や円弧を基本としている。
- 2) 手の複数の場所にアルファベットの文字が印刷された綿の手袋であり、Morrison Headyが考案した。

文献

- 1) Burnet, J. R. (1835) *Tales of the deaf and dumb*. Benjamin Olds, Newark, NJ.
- 2) Draper, A. G. (1904) The education of the deaf in America. *American Annals of the Deaf*, 49 (4), 352-363.
- 3) Miles, B. (1997) *Talking the language of the hands to the hands: The importance of hands for the person who is deafblind*. The National Information Clearinghouse on Children Who Are Deaf-Blind, Monmouth, OR.
- 4) 日本ライトハウス 21世紀研究会 (2005) わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー. 教育出版
- 5) Nordstrom, B. H. (1986) *The history of the education of the blind and deaf*. Educational Resources Information Center.
- 6) 指田忠司 (2012) 世界の盲偉人—その知られざる生涯と業績—. 桜雲会.
- 7) Wade, W. (1900) A list of deaf-blind persons in the United States and Canada. *American Annals of the Deaf*, 45 (4), 317-324.
- 8) Wade, W. (1904) *The blind-deaf: A monograph*. Hecker Brothers, Indianapolis.
- 9) Waterhouse, E. J. (1977) Education of the deaf-blind in the United States of America, 1937-1967. In E. L. Lowell & C. C. Rouin (Eds.), *State of the art: Perspectives on serving deaf-blind children*. California State Department of Education, Sacramento, 5-17.
- 10) 山崎邦夫 (2011) 年譜で読むヘレン・ケラー—ひとりのアメリカ女性の生涯—. 明石書店.